

活動報告

Activity Report

Vol.2



2010年4月22日(木)・23日(金) 2010年度プロジェクト科目 学生担当者説明会

プロジェクト科目では、クラス毎に、リーダー・サブリーダー・会計・CNSの各担当者を受講生の中から選出しています。今年度からは、学生成果報告書の担当も加わり、担当者合同説明会を京田辺・今出川の両校地で開催しました。参加した受講生は、74名でした。開講間もない開催となった説明会では、プロジェクト科目で使用するSNS型学習支援システムであるCNS(Communication Networking Service)の機能や授業運営費の利用方法、年度末に発行する学生成果報告書の仕様について、事務局より説明を受けました。各受講生担当者を中心に、能動的、主体的な行動が求められるプロジェクト科目では、受講生の行動力、熱意が成果を左右します。今後の各プロジェクトの活動に期待します。



2010年5月29日(土) 2010年度 第1回PBL推進協議会

PBL推進協議会は2007年度～2008年度に同志社大学、東京電機大学、専修大学の3大学が中心となって活動してきたPBL研究会を引き継ぐ形で、2009年度に同志社大学PBL推進支援センターの下に設置されました。PBL(Project-Based Learning)に関する情報交換及び研究の場として、事例や研究報告を中心とした協議会を定期的に開催し、PBLを実施している(あるいはこれから導入しようとしている)大学や高等学校等の教育機関の交流・連携をはかっています。2010年度第1回目となるPBL推進協議会が、同志社大学寒梅館2階208教室において開催され、21名が参加しました。今回の協議会では、「プロジェクト学習における導入教育の事例報告」をテーマに、大阪産業大学から2件、広島経済大学から1件の事例研究報告があり、大学や中学校高等学校の参加者から報告者への多数の質問や、活発な意見交換が行われました。参加者にはプロジェクト学習を担当している教職員が多く、PBLやPBLを取り巻く現状・課題に、共感する場面も多く見られました。また、正課・課外のPBLの捉え方についても様々な意見が寄せられ、今後のPBLの多様な展開について、可能性と同時に課題も見出されました。当センターでは、年間を通じてPBL推進協議会を定期的に開催し、PBLに関する事例報告や積極的な議論をしていきます。PBL推進支援センターのホームページ(裏面参照)でもご案内しますので、協議会にご興味のある方は、是非事務局までご連絡ください。



2010年6月12日(土) 2010年度 大学間合同成果報告会

東京オフィスの大セミナールームにて、大学間合同成果報告会を開催しました。2009年度より始まったこの報告会は、PBLに取り組む各大学から前年度に活動した学生チームが集まり、プレゼンテーションによる成果報告を行う行事で、大学間の交流・連携をはかる目的で開催されています。PBL研究会の幹事校であった東京電機大学、専修大学、同志社大学に今年より新たに法政大学を迎え、計4大学から各2チーム、全8チーム合計24名の学生が参加しました。東京電機大学からは「サーバの構築および保守・運用」および「フィジカルコンピューティングシステム的设计・開発」、専修大学からは「shareat ～一人暮らしの学生のための孤食解決及び食材廃棄削減支援システム～」 「WorkeeS ～学生の未来カタログ」、法政大学からは「企業の業務フローに関する課題解決」「商店街『おかず横丁』の活性化」、そして同志社大学からはプロジェクト科目「休耕地活用・自家菜園プロジェクト(食料自給率向上モデル特区)」 「『クラシック・コンサート文化を創る』プロジェクト」のテーマで、各メンバーがプロジェクト活動の成果について報告しました。大学はもちろん、学部や、学ぶ分野、学年も異なる学生の発表では、それぞれのプロジェクトの特色が反映され、プレゼンテーションの方法も様々でした。最初は、いつもの成果報告会とは異なる雰囲気にも学生も緊張気味でしたが、いざ発表が始まると熱のこもったプレゼンテーションに、会場は熱気に包まれました。大学を代表して発表するだけあって、どのチームもプレゼンテーションの質の高さや質疑応答への積極さが目立ち、主体的・実践型の学習の効果が十分に発揮され

ていました。全体的に「前年度よりも討論が活発化した」と、参加した教員からの総評も得られ、次回以降の開催を望む声も多く出ました。報告会後に開催された懇親会では、初めて会った学生同士とは思えないほど、活発な交流が行われ、あちこちで記念写真を撮影する風景も見られるなど、充実した1日となりました。



<参加学生の声の一部をご紹介します>

- 大学によるPBLの違いを知ることができてよかった。
- ユニークなプレゼンの惹きつけ方がとても参考になった。
- プロジェクトの進行において、どこもプロジェクトも、目標、タスクの分担、情報の共有が問題になっており、その解決方法が参考になった。
- 大学によってジャンルやプロジェクトの形態も異なっており、様々なアプローチ方法があると感じた。
- 他大学の発表をみると、「アイデアには限りがない」ということを知らされた。
- 様々な学部やコースの学生たちが役割を明確にし、有効に1人1人の人材が活用できていると感じた。
- PBLという共通のものがあると、他分野の知識がなくても、見えてくるものがあるんだなあと感じた。
- プロジェクトを通してチームで学ぶ大切さを知った。普通の授業では経験できなかったことを多く学べた。

2010年6月14日(月)・15日(火) 2010年度プロジェクト科目 第1回プロジェクト・リテラシー講習会



株式会社内田洋行・パワープレイス株式会社のご協力のもと、「伝える技術について～ポスターセッションの場合～」をテーマに、プロジェクト科目受講生を対象とした講習会を京田辺・今出川の両校地で開催しました。受講生や科目関係者82名が参加し、ポスターセッションの魅力的なポスターやブースの作り方についてご講演いただきました。その後、ロールプレイングによるポスターセッションのシミュレーションを行い、営業のプロによる応対の方法について実践的に学びました。後半はグループに分かれ、与えられたテーマに即したポスター製作を実習し、参加者の前で実際にプレゼンテーションを行いました。目を惹きつけ、一目で分かるポスター製作の工夫点や、声をかけるタイミング、複数の聴衆への配慮など、実践し、経験して初めてわかる点も多く、参加した受講生からは、「実際にやってみて、自分のプレゼンの悪いところや良いところがわかり、回数を重ねることに改善することができて良かった」「人と話すことの難しさや面白さを感じた」「聴衆者の目線になって考えることが最も大切だと感じた」といった声が聞かれました。ポスターセッションを実際に体験することで、より具体的なイメージが湧いたようです。春学期成果報告会だけでなく、プロジェクト活動の各種イベント等、様々なプレゼンテーションの場で役に立つ講習会でした。

2010年6月26日(土) 2010年度 第1回シンポジウム 「PBL教育における多面的評価ー社会が求める人材像ー」



文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に係るシンポジウムを、同志社大学今出川キャンパス明徳館1番教室にて開催しました。2010年度第1回目となる今回のシンポジウムの第1部では、松尾智晶氏(県立広島大学キャリアセンター准教授)、山本達夫氏(京都市行財政局人事課)、今村勲氏(久留米市市民活動サポートセンターセンター長)、武田一平氏(ニチコン株式会社社長)の、大学・行政・NPO・企業とそれぞれ異なるフィールドでご活躍されている各氏をシンポジストにお迎えし、それぞれの立場から社会で求められる人材像について、ご講演いただきました。第2部のシンポジウムでは、第1部の四氏に、本学の山田和人氏(PBL推進支援センター長、同志社大学文学部教授)、司会の今川晃氏(PBL推進支援センター委員会委員、同志社大学政策学部教授)が加わり、大学教育と社会が求める人材像とのギャップをテーマに、様々な観点から議論が展開されました。「採用面接の場では、どの学生も画一的になっている印象を与えている」など社会から見た学生の現状についての指摘や、各氏が奇しくも言及することになったコミュニケーション能力の欠如についての指摘があり、大学教育の在り方に叱咤激励も頂戴する一場面もありました。こうしたなか、PBLでは、プロジェクトを成功させるために、教員と学生が状況を共有し、双方のコミュニケーションを密にとっていくことが求められます。プロジェクト活動を通して、課題を自ら発見し、自らの力あるいはチームの力を結集して解決することを学び、また社会との交流によって、説明する力を伸ばすことができます。今回のシンポジウムでは、課題も多く表出しましたが、一方で、こうしたPBLの持つ教育力については、一定の評価をいただきました。PBLの可能性に学内外からも大きな期待が寄せられており、PBL推進支援センターとしての責務と課題に身の引き締まる思いのシンポジウムとなりました。

秋学期には、第2回目のシンポジウムを来年2月下旬頃に開催する予定です。詳細については、PBL推進支援センターホームページ(裏面参照)等でご案内します。是非ともご参加ください。学生のみなさんの参加もお待ちしております。

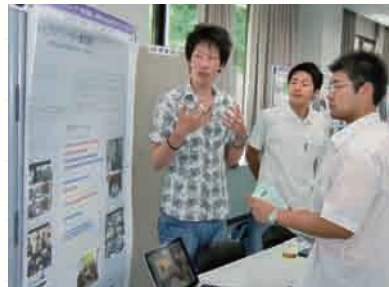
- 2010年7月14日(水) 2010年度プロジェクト科目 春学期学生懇談会
- 2010年7月21日(水) 2010年度プロジェクト科目 春学期SA・TA懇談会
- 2010年7月31日(土) 2010年度プロジェクト科目 春学期科目担当者・代表者懇談会



プロジェクト科目では、プロジェクト活動における問題点や課題について、山田和人プロジェクト科目検討部会会長が直接、受講生、SA・TA、担当者のそれぞれの立場からの率直な意見や感想、要望を聞くとともに各プロジェクト相互の情報共有や意見交換を行うことを目的に、懇談会を開催しています。各懇談会は今年度より、春学期末、秋学期末の年2回、実施することになりました。学生懇談会(7/14)では、チームとして協同で活動することの難しさや、メンバー間での役割分担に関する工夫点などについて話し合わせ、春学期の活動を振り返りながら、他のプロジェクトの成功事例や工夫を知ることで、自分達のプロジェクトに応用できるヒントを得るなど、秋学期に向けて意欲を喚起する機会となりました。続くSA・TA懇談会(7/21)では、プロジェクト科目受講経験者の多くがSA・TAとして参加していることから、プロジェクト活動の要所所で受講生と担当者間に立ち、両方の立場や意見を尊重しつつ、適切なアドバイスを行っている様子を伺うことができました。プロジェクトの違いや支援内容の違いによって、サポート内容や学生へのアプローチの仕方は異なりますが共通して、プロジェクト活動全体を客観的かつ俯瞰的に捉え、担当者や受講生の調整・仲介役として、時に悩みながらも、適切なアドバイスをしていく中で、SA・TA自らもこの科目を通して素晴らしい成長を遂げていたのが印象的でした。最後に開催された科目担当者・代表者懇談会(7/31)においても、今後のプロジェクト科目運営に役立つ貴重な意見を多く得ることができました。

■ 2010年7月25日(日) 2010年度プロジェクト科目 春学期成果報告会

春学期科目および春学期・秋学期連結科目を対象とする春学期成果報告会を、京田辺校地恵道館106教室で開催しました。初めて京田辺校地開講科目と今出川校地開講科目との合同開催となった今回の成果報告会では、前年度までの発表形式を変更し、ポスターセッション形式が採用されました。最終成果報告科目1科目、中間成果報告科目19科目の計20プロジェクトが、それぞれ工夫・趣向を凝らしたブースを設置し、各科目の受講生がブースを訪れた教職員や他のプロジェクトの受講生に説明しました。この成果報告会は、他のプロジェクトの活動状況を知り、自らのプロジェクトを振り返るとともに、プロジェクト科目間の交流を深める機会でもあります。当日はオープンキャンパスで、高校生や保護者、一般の方々の参加もあり、3時間半に亘るポスターセッションの会場は、終始、人が途絶えることがなく、活気に溢れた成果報告会となりました。ポスターセッション中には、スタンブラリーやベストプロジェクトの投票(来場者が優れた成果報告を行ったプロジェクトに投票)も行われ、廊下に設置された投票スペースは、審査委員の教員や学生、一般の来場者で溢れました。沢山の人が次々と入れ替わり訪れるポスターセッションでは、来場者からのフィードバックも大きく、また繰り返し説明することで、プロジェクトに対する受講生自身の理解を深めると同時に対話力も高まります。参加した受講生からは、「自分達が真剣にプロジェクトをしているからこそ、他のプロジェクトの発表も真剣に聞こうと思う」などの声が聞かれました。今回、他のプロジェクトの優れた様々な発表を聞き、「伝えることの難しさ」と「楽しさ」を経験し、来場者から貴重なアドバイスや意見をいただいたことで、秋学期の活動の充実が期待されます。次回、秋学期成果報告会は、秋学期科目および春学期・秋学期連結科目を対象とし、両校地開講科目合同で2011年1月23日(日)に今出川校地にて開催されます。全ての科目が最終成果報告となります。春学期よりも、一層大きく成長した素晴らしい発表を期待します。



ベストプロジェクトの投票結果は下記のとおりです。受賞したプロジェクトの皆さん、おめでとうございます。

- 最優秀賞:『スポーツイベント開催!』学生と地域の連携によるスポーツクラブ
- 優秀賞:環境教育教材作成プロジェクト — 環境マインドを持った次世代リーダーの育成
- 特別賞:花で生きる力を高める — 花を活用する生活と社会活動の企画実践プロジェクト —

卒業生からのメッセージ



高崎 扶美子さん

【プロフィール】
2006年度プロジェクト科目「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」受講生。2007年に同志社大学文学部を卒業し、(社)徳島新聞社入社。編集局文化部配属。2009年4月から文化芸能担当。

人見知りで出無精ながら、記者生活は4年目を迎えた。所属する文化部では、演劇や音楽、伝統芸能などの企画記事を担当。事件・事故の取材と違い、企画を考えて取材し、記事にしていく作業は、プロジェクト科目に似ている。

当時受講したプロジェクトは、「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」。大人でも取っつきにくい伝統芸能「能楽」に、小学生に親しんでもらうための汎用性のあるワークショップを考えた。

自分自身が能や小学生を知るために、能の公演に足を運び、小学校へ授業参観に出掛けた。知識を受講生で共有するため、議事録や観能レポートをまとめて情報共有サイトにアップ。能楽師や教師らと話し合い、企画を考えて実行していく。プロジェクトを通じ、人の話に耳を傾け、自分をさらけ出し、ときにはぶつかることで、新しい発想が生まれ、自分が伝えたいことがより明確になると気づいた。

今、仕事をしていて何よりうれしいのは、取材相手に「また取材をお願いしたい」と声を掛けてもらえること。一度の取材時間は長くても2時間ほどだが、真摯に向き合うことで、信頼関係が結べるのだと、あらためて実感している。

人見知りは相変わらずだが、幅広い年代の人と話すのは楽しい。先輩記者との雑談から新しい企画が生まれることも。出無精記者が鉄道マニアの先輩に連れ回されるぼやきルポ「鉄姫のとはほ…旅」は隔月連載で1周年を迎えた。

引込み思案な性格を変えたいと思って受講したプロジェクト科目で得た経験は、何物にも代え難い。自分の殻を破りたい人にこそ受講してもらいたい。多くの“後輩”が育つことを楽しみにしている。

同志社大学PBL推進支援センターの山田和人センター長によるコーナーです。
今回は、2010年7月25日(日)にポスターセッション形式で行われた、2010年度プロジェクト科目春学期成果報告会についてのつぶやきです。



プロジェクトで人は育つ!

試験・レポート期間であるにもかかわらず、150人を越える学生が集まって、プロジェクトについて語り合う素晴らしい発表の場になりました。3時間半の間、交代しながらにしても、発表し続けた学生さんのパワーと情熱にひたすら感激していました。伝えたことが伝わったことではなく、伝わったことが伝えたことになるという厳しさも学んだことと思います。一対一の対話型ポスター発表は、おおいに自己認識を深め、他者理解が進んだに違いありません。3時間半という長丁場をモチベーションを切らさずに発表を続けることができたのはすばらしいと思います。全体を通して、笑顔の絶えない活気に満ちたポスター発表であり、最初のプロジェクト紹介の3分間スピーチもすばらしかったです。一人ひとりが会場を盛り上げるように配慮しながら、発表をしてくれました。

山田センター長の
つぶやき